会報

板垣会

第2号

板垣家の人々（明治40年頃）。左から板垣良子、板垣退助夫人絹子、宮地茂秋（宮地茂春・軍の長男、退助の孫）、板垣退助、板垣六一、板垣千代子、板垣婉（小川一真夫人）、小川一真、本山信子（宮地茂春・軍の長女、退助の孫）

岐阜からのメッセージ

もし、板垣先生が今の日本をご覧になられたならば、何を感じられるでしょうか。思わず、そう問いかけたくなる状態に日本はあります。

現在、我が国は、政治への無関心、投票率の低下という、民主主義の存続にかかわる極めて深刻な問題を抱えております。特に若者の政治離れは深刻であり、板垣先生がご活躍なされた江戸末期から明治へと続く動乱の時期とは、比べる余地もありません。先生ご自身も、自由民権運動を主導された時は、まだ四十代の半ばに差し掛かった頃という若さでありました。

政治家の一番の仕事は、全ての国民に健康で文化的な生活をしていただくことです。昨今、企業においても「顧客満足度の向上」という言葉が、しきりに叫ばれるようになりました。政治家においての顧客である国民の皆様の満足度を上げることは、我々の使命であるのです。

板垣先生が追い求められた、政治の基本理念は、人間の自由を求め、権利を守り、幸福をはかってより良い社会をつくっていくというものでした。この理念こそが、国民の考えを反映させることを前提とした、民主的な政治への礎となっております。

板垣先生の人物評伝の中には、「無欲恬淡」という言葉が出てまいります。この言葉が表す通り、金銭欲をはじめ、全ての欲に淡泊であり、義理人情に厚く、私欲に決して溺れない清らかさが感じて取れます。政治家としては当然ながら、ひとりの人間として、美しい徳を持たれた偉人といえるのではないでしょうか。

没後、百年近くがたった今もなお、語り継がれるその功績には、只々、頭が下がる思いです。毎年、ご命日の七月十六日には、胸の中で合掌し、哀悼の意を示させて頂いております。

私も、日々の政治活動で、脚下照顧の精神のもとに、義理人情を尊び、決して私欲に流されず、清らかな心をもって、精進してまいります。

今後も、貴会によって、板垣先生の精神が、老若を問わず、広く伝播されますことを願ってやみません。

衆議院議員
野田聖子

板垣研究のいま

宮内庁書陵部主任研究官　真辺　美佐

本年（二〇一五年）十月、京都大学で開催された日本史研究会の大会の近現代史部会では、報告者の二人ともが板垣退助をテーマにして研究発表を行いました。一つは、中京大学准教授中元崇智さんの「板垣退助の天皇・華族観と政党指導の展開」、もう一つは私の「初期議会期における板垣退助の政党論と政党指導」と題する報告です。

日本史研究会は、昭和二十（一九四五）年に創立された全国規模の歴史学会ですが、この七十年間、板垣個人を対象にした報告は行われてきませんでした。それが、研究報告担当の二人ともが板垣の報告をするということになったわけですが、なぜ、いま板垣が取り上げられることになったのでしょうか。

一つは、敗戦から七十年経った今日、たとえば安倍首相が「戦後レジームからの脱却」を唱えたように、そしてまた、戦後の憲法解釈と安全保障体制を大きく変えることになる安保法制が可決されたように、いまという時代が、一つの大きな政治的な変動期を迎えていることが背景にあるからだと思われます。特に、小選挙区制や政党助成金を背景にした官邸主導の強いリーダーシップについて、賛否両論が闘わされており、そのことが「政党」のあり方について考えるきっかけにつながっているのだと思います（今回の日本史研究会のテーマも「「転換期」の政治と社会」という大きなテーマのもとに、板垣が選ばれたのでした）。

板垣は御存知の通り、日本で最初の政党・自由党を結成し、その党首となった人物です。また日本で最初の政党内閣、いわゆる「隈板内閣」も、板垣と大隈重信との連合により成立したもので、日本の政党政治に重要な役割を果たした人物です。しかし従来板垣に関する研究は必ずしも盛んであったわけではありません。従来、あまりスポットの当たってこなかった板垣の政党指導に注目することで、歴史の原点に立ち返って、日本の政党や議会がどのような歩みを進めてきたのかを再検証しようというのが、学会で板垣が取り上げられることになった大きな理由であったのです。

板垣研究の少なさについては、すでに今から五十年ほど前から指摘されていたことでした。昭和四十三（一九六八）年の『土佐史談』二二号に、当時東京大学史料編纂所教授であった小西四郎さんが、「板垣退助の伝記を調べはじめてから、既に約十年ばかりの時間をかけたが、まだ史料の蒐集でも満足な状態ではない」と嘆かれ、史料の提供を読者に依頼する一文を寄せられました。それから六年後の昭和四十九年、平尾道雄さんの『無形板垣退助』（高知新聞社）、絲屋寿雄さんの『史伝板垣退助』（清水書院）と、板垣の伝記が立て続けに出版され、従来部分的に知られていた板垣の行動を、全生涯通して知ることが出来るようになりました。しかしながら、平尾さんも絲屋さんも、伝記執筆の目的が、「自由民権運動の歴史」を明らかにすることでしたから、それらの記述は自由民権運動期までに多くが割かれており、明治十七（一八八四）年の自由党解党以降、とりわけ、国会開設以後の板垣の考えと行動が今ひとつ不鮮明となってしまいました。二つの伝記が出版された後の板垣研究も、岐阜遭難事件や外遊問題など自由民権運動を中心に行われてきました。

一方、研究の素材として貴重な一次史料の捜

索や調査も少しずつ進められておりました。平成六年（一九九四）年、高知市立自由民権記念館で開館五周年記念特別展として『板垣退助―板垣死すとも自由は死せず』が開催され、板垣会所蔵の板垣書簡はじめ、板垣が遭難時に着用していた血染めのシャツ、板垣を刺した短刀、板垣の負傷図解など、全国各地に点在する二百点近くにわたる貴重な史料が集められ、展示されました。それから十五年後の平成二十一（二〇〇九）年、板垣が外遊先のパリで買い求めたと思われる、ルイ・ヴィトン社製のトランクはじめ板垣関係史料が御遺族から高知市立自由民権記念館に寄託され、『板垣退助愛蔵品展』が開催されました。そして本年三月には、三重県選出の衆議院議員土居光華関係史料のなかから板垣の書簡が発見され、史料寄託先の松阪市郷土資料室では展示会が開かれました。このことは記憶に新しいのではないでしょうか。

板垣退助が敬愛したガンベッタの心臓が入った壷。板垣外遊の足跡を追い、フランスのパンテオンで真辺美佐撮影。ガンベッタは19世紀フランスの共和主義者で政治家。

このように板垣ゆかりの品々、史料が公開されるなか、平成二十一年、板垣会副理事長の公文豪さんの校訂により、全四冊からなる宇田友猪著『板垣退助君伝記』が出版されました。この伝記は、高知県立歴史民俗資料館に所蔵されている原稿を翻刻したものですが、一冊当たり五百ページ以上にわたる重厚な伝記となっております。校訂には相当な労力と根気がかかったであろうと、心底頭が下がる思いがしますが、本書の価値は、公文さんが同書解説で紹介されているように、これまで出版されていた史料集（『板垣退助君伝』第一巻、『自由党史』、『板垣退助全集』）でカバー出来ていなかった時期の記述が豊富なところです。つまりこれまでは自由民権運動期と政界引退以後の二つの時期が記述の中心であったのですが、この伝記では、憲法発布、そして国会開設以降についても詳細に記録されていて、板垣が政界引退する直前までの政治活動を一貫して把握出来るものとなっております。

以上のように、さまざまな方の努力や協力の積み重ねのおかげで、板垣を研究するための基盤が整ってまいりました。本年、日本史研究会の大会で板垣の研究報告が出来たのは、このような方々のたまものという以外の何ものでもありません。かくいう私も、その恩恵にあずかり、板垣研究を進めてきました。ここ数年は、板垣がどのような政治理念を抱き、どのような政党指導を行ったのか、自由民権運動期だけでなく、国会開設を経て政界引退までを連続して捉える作業を行っております。そうした過程で、板垣は、立憲政治下においては、議会で政策を議論することの重要性を主張していたということが分かったわけですが、このような板垣の主張は、強いリーダーシップのある半面、議論の多様性を基盤にして粘りよく話し合いをして、折り合っていこうという姿勢の欠けた、現在の政党や議会のあり方に警鐘を鳴らすのに十分ではないでしょうか。

板垣研究はもちろん私だけではなく、公文さんが板垣のさまざまな魅力を掘り起こされておりますし、中元さんも『自由党史』の記述を検証する研究を進めておられます。そのほかさまざまな方がいろいろな側面から着目し、取り組まれております。いま、板垣研究は、熱い時代に入りつつあるといっても過言ではないでしょう。今後、さらに多くの研究者が、板垣について研究・議論し、現在の政治を考えるたくさんの材料が提供されることになればと願います。

祖父母の語った板垣退助のこと

板垣退助ひ孫　小山　朝和

私の父方の祖母、小山良子（明治二十八年生れ）は板垣退助の五女で、大正四年に小山鞆絵（ともえ）と結婚。小山鞆絵（明治十七年生れ）は、東京帝国大学文科哲学科を出た学究で鞆絵三十一歳、良子二十歳の時になります。本稿は、この小山鞆絵から私が小中校生の頃に聞いた話を中心に、祖母良子、及び私の父、朝光（ともみつ）からの話などを合わせ、板垣退助に関する逸話のいくつかをお話ししたいと思います。

小山鞆絵と板垣良子の結婚式（大正4年）

小山鞆絵は、明治のアカデミズムを体現する学者で、同窓同輩には、一高で「巌頭之感」を残して華厳の滝に投身した藤村操や安倍能成、魚住景雄、岩波茂雄等、また彼らの英語教師であった夏目漱石、哲学勃興期の熱気に溢れていた東京帝大のケーベル門下では、やがて大正期から昭和にかけて哲学、心理学、美学、宗教学、文芸批評等様々な専門で、その興隆に寄与し指導的な役割を果たし、立派な業績を遺した人々が居りました。従って、その語るところは大変に面白く、彼ら学友、恩師との昔話から、広大な学問の水際まで実に限りの無いもので、子供心にもなにやら一つとして聞き逃してはならぬような気がしたものです。随分と可愛がられ、千夜一夜のように聞かされた話は、しかしあろうことかその大半は忘却の彼方へと去ってしまいました。誠に残念でなりませんが、それはともかく本題に戻りますと、祖父の語り聞かせてくれた板垣退助の話は、考えれば祖母との婚姻から板垣退助の没年までの四年間に聞いたもので、私が失念してしまった話を含めると数多く、板垣翁も能弁にして話好きな人であったと思います。では、その幾話かを。

一、武市半平太の切腹　武市半平太が慶応元年藩庁広庭にて切腹した時の話は有名ですが、翁は「三度腹をさばく実に見事なもので正に武士の鑑であった」と作法を見せながら語ったと言います。

二、中岡慎太郎の評価　翁は常々「中岡は実に大した器量人であった、他から一頭抜きん出ておった」とその人物を高く評価し惜しんでいたとの事です。

三、東北戊辰の役・今市　明治元年日光に籠る大鳥圭介等の幕軍を追い今市に至った時の事、川筋に街道の交わるところあり。山地も迫り何処から敵が寄せてくるや分からぬ難所に差し掛かり、幕僚が斥候報告を基に進言する備えを入れて布陣させたが、しきりに胸騒ぎがする。そこで半信半疑の幕僚に命じてほとんど備えのなかった方面に兵を伏せさせたところ、暫し後、その場所へ敵が突如現れて攻めかけてきた。幸い備えの兵が応戦、撃退し事なきを得たが危ういところであった。「何故分かったのですかと聞かれたが、こればかりは戦場の勘という他ない」と言っていたとのこと。

四、東北戊辰の役・日光　台林寺住職をもってした大鳥圭介説得は有名な話ですので翁の語る詳細は省略しますが、大鳥旧幕府軍の最終撤退について「大鳥は神君の廟に籠るなど大きな心得違いをしている。撤退を間違いなくさ

せるため、窮鼠かえって廟に火など放たぬよう囲みの一口を開け攻囲の軍から鉄砲を打ちかけさせず事なきを得た」

五、東北戊辰の役　棚倉か二本松か又他藩か藩名を失念してしまいましたが、ある時、敵陣から打って出てきた軍勢の中に鎧兜に身を固め矢籠を背負い重藤の大弓を手挟んだ立派な騎馬武者が躍り出て、弾丸の飛び交う中、寄せ手の新政府軍に向かい馬を立て盛んに空に向かって矢を射ている。気づいた翁は打ち方を止めさせたが、その武者は流れ弾に当たって落馬、検分すると既にこと切れていた。その武者は白髪で兜に香を炊き込め、刀の柄は抜けないよう白布できつく縛り、矢尻は笠懸に使う様な神頭矢に替えてあったとのこと。「錦旗に弓は引けぬが意地を見せたあっぱれな侍であった」と、この話は何度もしていたようです。

六、会津の戦い　よく紹介される話でそのままですが、会津の戦では誠に領民の抵抗は皆無であった。武士だけがし烈に戦い領民は至って無関心、殿様が虜囚となっても嘆く様子もない、大いに考えさせられた。

七、江藤新平佐賀の乱　明治六年征韓論問題から下野した西郷、板垣、江藤等であったが、それぞれの国元は不平士族で沸き立つような状況。明治七年、それを抑えると言って佐賀に戻ろうとする江藤を翁が説得しようとした時の話。「今帰れば必ずや君は担がれると説いたが帰郷してしまった。佐賀の議論倒れで火中に入ればまず困難じゃ、案じていたがやはりであった」

八、西郷南洲西南の役　明治十年の西郷隆盛の決起について、翁は「西郷さんは本気で攻め上がるつもりは無かったろう。もしそうであれば決起と同じくしてまずは速やかに馬関海峡を抑えるのが兵法の常道だ、熊本鎮台などはそのあとでよい。九州を抑えて時期を待つのが良策であることは西郷さんなら承知していたろう」。この話は、祖母良子も幾度か聞いたことがあると話しておりました。今となってはそれ以上の事は聞けるはずもありませんが、祖父鞆絵のこの話はもっと長かった記憶があり、鞆絵は翁から何を聞かされていたのか、忘れてしまった己の不明が残念でなりません。

ここまでが、祖父鞆絵が翁から聞いた逸話の幾つかですが、紙面も残りが少なくなりましたので、後年の逸話を一つ。

私が昭和四十四年に大学に入り、合気道部に入部した最初の仕事が同年四月に亡くなった合気道開祖植芝盛平師の葬儀の下足番。この話を父朝光にしたところ、盛平さんの演武は本部道場で特別に見せてもらったことがあると言います。聞けば、二代目道場主で盛平師の長男植芝吉祥丸さんとは仕事での知己、吉祥丸さんが或る日、盛平翁に「知己の小山氏は板垣退助のお孫さん」と話したところ、「お連れしなさい、演武を披露差し上げたい」とのこと。普段は門人以外に滅多に技を見せない盛平翁が珍しいことをいうものだということで、父朝光が道場に出向くと、盛平翁は、「私は若いころあなたのおじい様に心酔し紀州に来られた時は何日もついて回り警護役のようなことを勝手にしていたものです。滅多にないご縁なので合気道の技を披露して差し上げましょう」と、門人数人を相手にポンポンと鞠のように投げ飛ばす神業を行い、それはいかにも不思議なものであったと父を驚かせたようです。私がついぞ見ることが叶わなかった開祖の技を板垣退助翁の縁で目にした父を羨んだものです。植芝盛平師は明治十六年の生まれ、この逸話は日露戦争前後の時期ではなかったかと思われますが、父も吉祥丸氏も既に亡く確認の術はありません。

書ききれなかった小山鞆絵が板垣翁から聞いた話、祖母良子、父朝光からの話、品川の墓所の事などこの機会にせめて忘れぬよう手元帳に控えておこうと思い立った次第。この気付きの機会を与えて下さった板垣会に感謝して筆を置かせて頂きます。

板垣退助と馬

高知県競馬組合競走馬診療所長　長山　昌広

板垣退助は、けだし、自由民権「馬術」家であります。

土佐の偉人のなかで、馬に一番熱中し詳しかったのは、間違いなく板垣でしょう。板垣の論文「競馬の目的」には、「私は元来馬が大好きで、駆馬も随分好んで行ったのでありまして」と、自分で書いています。

板垣はこの明治三十四（一九〇一）年の競馬に関する論文のなかで、「元来この競馬といふものは（中略）悪いものとは思はない」などと競馬を評しています。板垣は、「馬が好き故引き出され」、京浜競馬倶楽部の会頭にまでなっています。同倶楽部は、東京競馬倶楽部を経て、現在の中央競馬会につながる団体の一つです。

当時の競馬といえば、現在とは比べ物にならないくらい、馬券に関連した弊害が強く非難されていました。およそ明治期の政治家や識者と呼ばれる人で、板垣のように競馬のことを、「社交上、国家経済上、国民娯楽上、至極善いものであると信ずる」などと公言した者は、一人もいません。現代でさえ、そこまで言う政治家はいないでしょう。競馬倶楽部の会頭だから、という社交辞令の範ちゅうを越えています。当時競馬は、軍馬確保を大目的とする必要悪、といったイメージが一般化しており、そこまでわざわざいう必要性はまったくなかったのです。

しかし、その論文の中身を見ますと、「立憲治下の民は成る丈け広く多く交際して、衆と共に楽しみ、互に打解けて歓語するといふ事が必要である」などと時代を見通した必要性十分な論旨となっていて、娯楽の交際、馬匹改良、余剰金の慈善機関への寄付等、先駆的な意見を述べていて驚かされます。

板垣はこういう触れなくてもよい問題に、世論に流されない意見を堂々とぶつけました。後年社会改良の運動に傾倒したときも、支援者が時流に乗った意見を言うと、あえて「誤っておりはせぬか」などと、本質的におかしいことはおかしいと、誤解を恐れず演説で述べています。その常人を超えた異才ぶりは、板垣人気の一端となっていたと強く感じます。

時代が前後しますが、そんな馬術家板垣が面目躍如となる事例は、やはり明治四（一八七一）年の薩摩、長州、土佐への献兵要請の折の騎兵隊創設でしょう。板垣の活躍によって高知藩だけが、「騎兵のご親兵」となる、本格的な騎兵隊を献上できたのです。

十九世紀の近代国家にとって西洋式の軍隊は必要不可欠であって、騎兵隊はフランスでもドイツでも主力でした。しかし、当時の日本には馬を、「隊伍正しく整列」させるどころか、西洋式に調教された軍馬など、一頭もいませんでした。薩摩にも長州にも古式馬術の名人はいましたが、一騎打ちが基本であり、西洋式の騎兵隊の編成はできなかったのです。

土佐には藩政期から、集団の騎馬戦を特徴とする「要馬術」がありました。この集団というのが、日本の古式馬術にはめずらしい点で、後の騎兵隊創設時に大事な役割を果たします。朝鮮をルーツとする要馬術の創始は関東ですが、事実上土佐の独壇場で隆盛し、土佐でお家芸に準じる武芸となっていました。板垣は、その要馬術まで会得していたのです。

板垣が明治四十（一九〇七）年に武芸関係の雑誌に投稿した「馬匹改良と馬術の関係」には、「余は馬術に於て少しく素養なしとせ

ず。初期大坪流即ち馬工郎乗を学び、更に要馬術（鞍上槍刀を使用し且つ敵騎と組打の術を演ずるもの）及び、日本源家古伝馬術、俗に調息流と称するものを学び、最後に和蘭陀馬術と仏蘭西馬術を学べり」と、これまた自身で、和洋の馬術に精通していることを披露しています。土佐以外ではあまり知られていなかった要馬術については、カッコ書きで注釈を入れる力の入れようです。

土佐でも馬術の流派は細かいものを入れると種々雑多の感がありますが、主流はシンプルで、まず往古より大坪流が基本的な馬術として浸透しており、これに後から、新風となる要馬術と調息流が台頭してくるのです。

調息流も歴史は古いのですが、伊予の達人の中興により事実上新流派の勢いで幕末の土佐に伝わっていて、近年その詳細な資料が見つかり、現在安芸市の歴民館に保存されています。馬を疲れさせず遠駆けさせることが特徴で、この技は後に騎兵隊の行軍の技術と関連したと思われます。

板垣（当時、乾）は、古式馬術の大坪流、要馬術、調息流、そして西洋馬術に熟達していたわけで、このことが、騎兵隊創設に大きくかかわってきます。

その馬術の奥義を極めた板垣をして、幕末の江戸で洋式騎兵学トップの指導者達の門をたたかせ、徹底して西洋式の騎兵学、馬術を、研究修行しています。

ついに慶応三（八六七）年、土佐に帰った板垣の進言により、「古流と洋式の兵学を混同し互いに詮議するよう、かつ馬術も平馬、要馬、調息、軍馬仕立てにし、騎兵修行するよう」という意味合いの騎兵練習発令が出されます。

平馬とは通常の馬ということですから、この場合基本となる馬術、大坪流をさすと思われ、つまり、板垣の会得した古流の三馬術をもって騎兵隊の基礎となし、また板垣の知る西洋式の馬術とあわせて騎兵修行をせよと、そう読み取れます。こうして騎兵隊創設が始まりました。

ここまで準備しても、日本の馬を西洋式に調教するのは、並大抵のことではありませんでした。これは騎乗者にもいえ、大坪、要馬、調息の三大流派の大家中の大家に軍馬指南役、導役が命ぜられ、猛練習が続けられました。

こうしてやっと土佐で本格的な騎兵隊ができたわけですが、もし板垣の活躍がなければ、日本の正式な騎兵隊の創始は相当遅れていたでしょう。「田村久井談話筆記」に、「明治初年騎兵を置いたのは幕府（静岡藩）と紀伊と土州」とあって、桂太郎が陸軍次官の時、板垣に面会して土佐騎兵の組織に関する事項を質問した際の、板垣の談が載っています。

「土佐は三面山を負ひ他国より侵入を受くる事容易なれば国境に騎兵を置き伝令なとに必要なれば国に事あらんと察し斯く早く置きたりといへりとぞ然れども最初の兵数は三十騎計にてありしが兼て要馬をなしたる事とて其の動作も甚た優り居れりと云ふ」とあり、要馬術があったから、騎兵隊の馬の動作も優れていたと、板垣自身が言っています。

板垣が絶賛した要馬術は、その試合が大規模な騎馬戦形式で人気があったことから、自由大懇親会の余興の最終演目に選ばれるなど、土佐では近代になっても続きました。しかし、時代の流れにはあらがえず、板垣が天寿をまっとうした大正期を潮目に、事実上土佐からも消えてしまいました。

日付のわかる要馬術最後の試合の記録は、大正十二（一九二三）年、板垣の銅像除幕式に関連した余興の一つでした。

要馬術は、紀元前に遡る大陸北方騎馬民族の秀でた戦闘馬術が、朝鮮半島で熟成され、当時最先端の朝鮮流として江戸初期の日本に伝来、土佐を伝承終着の地として隆盛し、くしくも希代の名馬術家板垣退助とともに、その終焉を迎えたのです。

板垣姓のルーツをたどって

板垣歴史総合研究所　板垣　國和

板垣姓のルーツは古文書や日本家系図協会によると甲斐国板垣荘より興るとあります。

人は、成長するに従って親を知り家を思い、先祖を知ろうとするのは、私だけではなく大部分の人の常であろうかと思います。

私は十数年前から自分の姓である板垣に関する氏、姓、地名、神社、仏閣、銅像等の研究のため、板垣サミットを立ち上げ各地方の新聞、ラジオ、テレビを通じて同じ板垣姓の人に呼びかけ、古文書、系図、家系史、言い伝えなどから資料を集め、板垣姓のルーツを探る旅を趣味としています。

そこで最も著名な人物、板垣退助先生を訪ねれば良いのではと一九九九年に高知市立自由民権記念館を訪ねました。当時の西田幸人館長さんに板垣ですと名乗り、話すとVIP並の好意的な感じで迎えられました。

板垣退助先生のお名前は、平成の世になっても、坂本龍馬とともに凄いなあと思いました。

西田館長さんより毎年法要を行い、お墓を管理されている板垣会を紹介していただきました。これが古谷理事長さんとの出会いでした。それから十六年の月日が流れ、今年も七月十六日の退助翁の命日に高野寺での法要に参加させていただきました。

又、毎年岐阜市では板垣退助先生遭難の地、岐阜城金華山の下、岐阜公園で板垣退助先生の感謝会(澤田栄作会長)が行われ、退助先生の銅像前にて玉串を捧げ、感謝の参拝を致しております。野田聖子代議士をはじめ各議員や政治家、支持者等百人余りが集まります。

「板垣死すとも自由は死せず」のセリフとともに退助先生や民権運動が全国に知られる起爆剤になったのがこの岐阜の地であり、岐阜遭難事件から百三十三年経った今なお退助先生のカリスマ性は健在であり、政治家やその支持者の聖地でもあります。

板垣姓の興りは、平安後期の武将・新羅三郎義光こと源義光を始祖とする甲斐源氏嫡流の武田信義の子・兼信が、甲斐の国・板垣村を治め、板垣三郎兼信を名乗ったのが姓の原点です。甲斐善光寺から東光寺一帯が板垣村、板垣の郷といわれています。

山内家家老本家・乾家については、乾氏の系図に稲葉山城より乾の方角、濃州池田村に屋敷を構えたので、土岐道謙が乾姓を名乗ったと書かれています。司馬遼太郎氏の『功名ケ辻』によると、土岐氏一族の乾彦作を家来とし

毎年、板垣退助銅像前で開かれる板垣先生感謝祭(岐阜市)

て山内家に連れて来たのは山内一豊公の妻・千代さんであると書かれています。千代さんは岐阜の郡上八幡城の初代城主遠藤盛数の娘であり、妻の鑑は山内一豊の妻と昔から言い伝えられているのは有名です。

退助先生は、戊辰戦争の一八六八年の頃まで乾退助を名乗っていました。ご先祖は、武田信虎、信玄の親子二代に仕えた武田家の武将・板垣信形ですが、信州上田原で戦死。そのあと長篠の戦いで敗れて武田家が滅亡したあと、板垣信形の子・板垣信里は武士を捨て、新潟県見附市出雲田荘の一部を開発して市野坪と名づけて農業に従事しました。又、信形の孫ともいわれている板垣加兵衛正信は、戦乱の時代を武士として生き抜くため、美濃の土岐氏一族である山内一豊公の家臣・乾備後和三を頼り、板垣姓から乾家の分家・乾加兵衛正信として庇護され、関ヶ原の戦いのあと山内家の家臣として遠江掛川から土佐へ来ました。それから十代目が乾退助であり、戊辰戦争の東山道の官軍司令官として甲府へ進軍のとき、岐阜の大垣で天皇の命を受けた岩倉具視の進言により武田信玄公の重臣・板垣駿河守信方の子孫と名乗り、乾姓から板垣姓に改め、甲府城を無血開城します。

板垣退助先生のご先祖の板垣～乾～板垣と改姓の歴史を辿るとき、この乾家の本家を抜きにしては語れないと思い、その乾氏本家を探し訪ねて、やっと子孫の方にたどり着くことが出来ました。高知県南国市比江の永源寺の裏にある「乾の大墓」なる巨大なお墓（卵塔ともよばれている）が、土岐、乾両家の墓所であります。持ち主は千葉県の土岐さんですが、父が明治初年に土岐姓に改名、その後、廃藩置県のあと乾姓に戻ることが難しかったので、今なお土岐の姓を名乗っています。

この土岐さんと連絡をとり、数年前に品川神社裏の板垣退助翁のお墓でお会いして、二人でお墓掃除をしてお参りさせていただきました。また、土岐家、乾家の系図を拝見させていただきながら、退助先生からさかのぼって板垣姓のルーツをたどると、退助先生は乾姓から板垣姓に改名し、本家の乾家は土岐姓に改名し乾姓に戻れぬまま現代に至っていることに、また歴史的運命を感じた次第です。

武田の武将、板垣信形を祀る
板垣神社（長野県上田市）

【資料1】

後藤象二郎追悼演説

板垣　退助

伯爵を哀悼せらるゝ会葬諸君よ。私は後藤伯爵の親友として、伯爵の功績を挙げて諸君に告げ、相共に悲哀痛惜の情を表し、伯の遺骸に対して別を告げ、茲に埋葬の礼を厚くせん事を希望するのであります。然るに後藤君が朝野に於ける一生の功績は一篇の歴史を為し、逐一之を挙ぐるに堪へざる訳でありまして、又、既に世人の知る所でありますれば、私は唯親友として、或は世人の知らざる所と感ずることを述やうと思ふのであります。

後藤君と私は天保八年と九年との間に生れた者であつて、其居宅は相距ること僅かに二丁に足らざる所でありまして、君の幼名は保弥太と云ひ、私は猪之助と云ひました。私を呼んで『猪之ス』と云ひ、君を呼んで『保』と云ひ、共に竹馬を馳せし時より今日に至る迄交際を続けるものであります。又、私は乱暴徒らの盛りに、早や後藤君は吉田東洋先生に愛せられて、学を修め身を立て、十八歳にして郡奉行の職を勤めたのでありました。

藩政の時代より今日に至る迄、後藤君と私は時々政事思想を異にし、或時は政敵とな

り、或時は政友と為り、交り疎闊なるかとすれば又親戚も啻ならざる交を為し、此間に見聞せし所を以て言へば、君の性は縦横機敏の才を懐き、寛大にして広く人を容れ、豪膽にして能く事を致し、少しも退守の風なく活発進取の気象に富み、磊々落々たる英雄の風采がありました。

維新の前、後藤君は京都に在て、佐幕勤王、攘夷開国の争ひ劇烈なりし時代には、其行違より甚だ君が身に危き事がありました。君が刺客の難に罹りしと云ふ事は殆んど風説の立たざる日はなき位であつたのであります。然しながら、君は此の間泰然として動かず、現に刺客が君を殺さんと決心して面接せし事屢々之ありしも、君が磊々落々、和気藹然たる風采に感化せられ、其志を果さずして空しく帰りし事でありました。其後、私が東北の戦争を終りて京都に行きました時、復た刺客の後藤君に向はんとせし事がありました。開は君が其時より遷都の事を主張して居つたので、之が為めに頑固党は君に反対したのでありました。遷都の議論は一番早く後藤君が唱へしと云ふ事は、確かに三条実美公の御話でありました。

東京・芝公園にあった後藤象二郎銅像（明治36年11月除幕）

王政復古、封土返上の事は坂本龍馬氏の発意であつたと云ふ事を聞きましたが、兎に角、之を以て天下の問題とせしは確に後藤君の力であつたのであります。当時、此策を容堂公に献じ、其採用する所と為て、先づ後藤君が先発として上京し、続て容堂公も上京せられたのでありました。此策の実行せらるゝ迄は、主として後藤君の力に依りし事と私は確信するのであります。之を当時の形勢に於て形容すれば、各藩の有志は此方針に向て進行して居りまして、或は攻具を整ふるものあり、或は砲撃を試るものあり、或は塀を渡り、或は石垣を登り、城に入らんとする者ありしに相違なきも、確かに城門を開き必勝の計を立てしは後藤君の力であつたと言はざるを得んのであります。

又、彼の英国公使パークス氏が初めて参内の時、十津川浪士の之を途に要撃するに遭ひ、後藤君は参与の身を以て先ちて其難に当り、終に其暴徒を斬斃したのでありました。若し此時、後藤君微りせば英国公使は危いのでありました。若し又暴徒にして其志を遂ぐるに至らば、必ず国難を惹起すに相違ない。後藤君は文事の外、兼て武術をも学ぶ所ありて此手柄を顕はしたのでありまする。当時、其賞

として英国皇帝より剣を賜りたのであります。慥此剣は今日の行列に加はりて居た筈である。

又、後藤君は維新の功績のみならず、立憲の創設に於ても大に与りて功があつたのであります。彼の民選議院の建白を為して、爾来私は表面に立ち、後藤君は裏面に在て大に之を助けたので、却て後藤君の力多きに居ると思ふのであります。後に又、大同団結を唱へしが如きは世人の知る所でありまして、私の喋々を要せぬのであります。

総じて後藤君は創業の技倆あり、或は守成の事としては足らざる所あるが、君は大事を断じて能く行ふの技倆は決して凡俗の及ぶ所でないと思ひます。又、後藤君の人と為りは、自ら過去の功績を忘れ、又能く人の旧悪を忘れたので、是即ち君が創業の技倆ある特色であります。又、彼の航海通商其他、凡て新事業に後藤君が先鞭を着けし者は沢山であります。

扨又後藤君と私は大に性質の異なる者があつて、後藤君は才を以て働き、私は愚を以て尽せし者でありまして、他人は之を怪んで何故に後藤君と親友なるかと云ふ問もありましたが、私は其能を異にするを以て大なる益友とするのが第一でありまして、其次は後藤君が最も有為の気象に富んで居たのである。尋常老人は未だ棺を蓋はざる前に於て既に論の定まるものでありますが、後藤君は今日茲に棺を蓋ふ迄は何をするか測られん人でありました。君は曩に身を投じて朝鮮独立を謀らんとせし事がありました。又二十七八年の間に於ても、朝鮮の顧問と為りて一臂の力を添んとせし事がありました。老て益々壮んなる者でありました。是私が棄んと欲しても棄る事の出来ないので、幾度分れても亦合はざるを得ざる所以であります。然るに今日、茲に此遺骸と永く別るゝに臨んで最も悲痛哀惜に堪へないのであります。私は茲に言ひたい事は数々ありまするが、悲痛の情、胸を塞で其言ことを尽す事が出来ぬのであります。会葬諸君は我々の此の嘆きを分たる、諸君であれば、聊か感ずる所に由り弔詞を述べます。

（『東京朝日新聞』明治三〇・八・二）

【資料2】

板垣伯の相撲談

▲回向院の常設館

回向院内に相撲の常設館を建つること、力士の養老法に就ては、予てより相撲協会の依頼を受けて、其方法規約を考案して既に出来上つた。右は余が多年の宿論であつて、相撲が我国唯一の国民的遊戯なるに拘はらず、天覧を仰ぐに足るの設備もなく、外国貴賓を招いて観覧せしむることも出来ない、少しの雨にさえ興業することの出来ぬのが今日迄の有様であつた。然るに愈よ常設館を建築して国民的遊戯の公開場となし、内外に対して恥かしからぬ設備を致して、一月、五月の本場所の外、撃剣にも柔道にも其他の各種の遊戯興業物にも使用することにした。即ち耳よりする音楽とか、又目と耳と両方よりする演劇等を除いては、目だけよりするものは悉く此館で開催し得らるゝ筈である。

斯くして力士が貴顕と握手し得らるゝ、様にし、同時に社会一般に高尚なる平民的娯楽として観覧することを得る様にするならば、相撲道の発達は云ふに及ばず、国民の元気風俗に及ぼす良好なる影響は決して尠少でないと信ずる。

▲力士に対する保護法

相撲常設館の建設と相待つて完成すべきは力士の保護法である。廃業後に於ける養老法或は中途病を得た時不具となりたる場合等、凡て其保護法は今日までは不完全極まるものであつて、今日の侭とするならば実に重要な社会問題である。又人道問題である。是非一日

も早く改善して、保険法、貯蓄法、其他種々の方法を設けて、彼等の終身を安らかにしてやらねばならぬ。力士は他の職業と異つて其全盛期が実に短かい。さりとて他に転業する技能に乏しい。僅かに少数の年寄株を求むることもこれ亦限りがある。特に幕の内以下の者で早くも全盛期を過したものに至つては、其末路最も憐むべきものである。彼等に対する保護法の安全は即ち彼等の品位を増すものであるから、相撲道の発達上忽せにはならぬ問題である。

▲国民的遊戯としての価値

建国の初めより歴史的に発達して来た我国の相撲は、実に世界に卓絶せる文明的遊戯である。古代に在つては尚武の国是と相待つて、歴代の朝廷は之を単に遊戯とのみ見なさず、神聖なる護国の一具として、国民の体育を発達し尚武の気象を養ふべき良制度として採用してゐた。故に典例儀式が整然として備はり、相撲節会劇覧の儀の如きは一種の観兵式にして、大臣が勅を奉して七道より力士を貢せしめ、総裁たる相撲別当の官は勅を以て親王殿下が必ず之に当られたものである。其他神事相撲の如き、国民の体力養成法として実に好個のものであつた。王朝式微の後ち一時衰えて、次で武門に保護者を得、徳川時代には各諸侯は競ふて相撲を奨励した。故に其技の発達は世界に於て日本に及ぶものなく、其人心を感化するの深き、我元気ある国民の気象を陶冶するのに偉大なる効果があつた。敵手に対して礼譲を重んじ、毫も卑劣の行為をなさず、且つ危険を避くるが為め逆手を禁ずる等、世界いづれに行くも斯の如き円満に発達した遊戯はない。

闘手の如き、拳闘の如き、蛮風を脱せざるものは云ふに及ばず、フートボール、ベースボール、ボート、競馬と沢山あるけれども、尚武の気象に関連して国民全般に効果を与へ、貴賤老幼男女の別ちなく言語の違ふ外人にまで一様に解せられ、且つ如何なる場所、如何なる人も、便宜に自らも行ひ得る遊戯は相撲の外はない。故に余は此を以て万国に勝れたる国民的遊戯なることを信せんと欲するものである。

▲相撲より善良の感化

単に遊戯としてのみならず、国民の体育に一大関係ある護国の技芸なること、これ善感化の第一である。尚武の気象を発揮して淫靡惰弱の弊を救ふこと善感化の第二。又勝敗栄辱の念を昂進せしめ、一種勝気ある国民性を養成するは即ち第三の善感化にして、勝敗を公明正大にし其勝敗を土俵の上のみに限らしめ、決して私怨私情を挟まず、以て武士的精神を涵養する之れ第四の善感化にして、我国の兵制たる挙国皆兵の主義に合して、有ゆる階級に普及せる角力が其精神と体格に大なる効果を有することは第五の善感化なり。

以上五種の感化は皆我国民性を養ふの大なるもので、其功は昔時希臘のオリンピヤの競技に依て養ひし国民性に勝るとも劣らない。曾て徳川氏の太平元禄淫靡の風が大に上下を腐らしたる時に、辛ふじて優柔淫逸の惰気より国民を救ひ一種の健全なる気象を今日に維持し得たる其原因の重なるものは、実に相撲流行の余徳であると思ふ。

▲国家も亦保護すべし

斯の如く我国民に善影響を与へたる相撲道は、決して経世家の等閑に附すべきものでない。故に国家としても相当の保護奨励を与へて宜いと思ふ。要するに外観の設備を世界的文明的たらしめ、同時に前述の力士保護の組織を完全にするのは、我国の角力にとつて目下の急務である。

（『土陽新聞』明治四一・五・二九）

【解説】

【資料1】 後藤象二郎追悼演説

板垣退助の竹馬の友・後藤象二郎は、明治三十年八月四日午前八時、東京高輪の自邸において六十歳の波乱の生涯を閉じた。遺言はなく、「食へん時にゃ家でも敲売て食へ」とのみ言い残した。病床で、「葬式が五月蠅けりゃ、品川沖に水葬せよ」と語っていたというのも後藤らしい。

葬儀は極めて質素なもので、大江卓、井家角五郎、安岡雄吉が万端を指揮し、生花、放鳥など虚飾に類するものはことごとく謝絶した。万事土佐風で、銘旗一流、造花四基、龍燈四基、高張四張、箱提灯四張のみで行列を立てた。また、土佐の国風として婦人の会葬は厳禁であったから、近親者であっても婦人は門内で柩を見送るのみであった。

葬儀は八月八日に行われ、午後一時に高輪の自邸を出た葬列が青山墓地に到着したのは四時半であった。

板垣の弔辞は、自ら霊前で述べたいと申し込んだものだった。当日の会葬者は松方正義首相をはじめ無慮千余名。友情と悲哀あふれる追悼演説を、東京朝日新聞は「伯の棺前に起て此演説を為すや愁悄の色顔に現はれ一言一句会葬者に無量の感動を与へたり」と報じた。

追悼演説は、大町桂月著「伯爵後藤象二郎」にも全文収録されているが、ここでは東京朝日新聞掲載のものを採った。原文には句読点がなく、段落も少ないため、読みやすくするため句読点をほどこし、段落を増やし、ふりがなを振った（資料2も同じ）。板垣退助と後藤象二郎の濃密な人間関係、人間味あふれる板垣の人柄を知る好個の資料として紹介した。

【資料2】 板垣伯の相撲談

これは両国国技館が完成する一年前の板垣談話である。相撲に関する数ある板垣談話の中でも出色のものと言ってよいだろう。

国技館の歴史は板垣退助抜きに語れない。両国国技館（初代）が開館したのは、明治四十二年六月二日であった。設計は日本銀行を設計したことで知られる工学博士辰野金吾。開館式には内外の貴顕紳士三千人が招待され、板垣は開館委員長として式辞を述べた。一万三千人を収容できる相撲常設館の名は議論百出して決まらず、開館直前、命名委員会の多数を占めた「国技館」の名が板垣委員長の承諾を得てようやく決まった。

国技館最初の場所は六月五日から始まった。二日目には前代未聞の一万五千余人もの観客が押し寄せた。連日の大観衆が絶頂に達したのは九日目。午前三時には数万人が詰めかけて大混乱となった。群衆は「常設館は小さい、もっと大きく拵えろ」と口々に叫んだ。ところが八百長相撲が目にあまり、東京朝日新聞が「殊に十日目に至つては、自重の度を過して馴合となり、八百長に次ぐに八百長を以てしたるは、国技館の名を汚すもの、角觝道の頽廃もやがては此処に萌すべし」と書くほどだった。この有様に、ついに板垣の堪忍袋の緒が切れる。翌四十三年一月二十六日には、友綱親方に命を下して同部屋及び伊勢の海部屋の力士を集めて訓示し、太刀山、国見山らに八百長相撲禁止誓約書へ署名させたのである。誓約書の第二項目には、「土俵上の勝負は神聖に決すべく、苟も私情に亘り情実に流れ、見苦しき行動はなさざる事」とあった。

板垣の相撲好きは少年時代からのものだった。自由民権期、潮江新田の自邸には土俵を設けていたほどである。東京に住まいを移してのちは、自由党総理でありながら本場所中は選挙遊説を断った逸話も残る。太刀山は、板垣が西郷従道の協力を得て相撲界に引き入れて育て上げた大横綱である。板垣は早朝から相撲部屋へ足を運び、現役力士の取り組みを指導するほど並外れた相撲通だった。

国技・大相撲発展の基礎を築いた板垣退助の功績は極めて大きい。談話中、引退・廃業後の力士の処遇にまできめ細かく気を配っていることは特筆大書すべきことである。

（公文　豪）

高野寺で九十六回忌法要

板垣会は、七月十六日、高野寺で板垣退助九十六回忌法要を執り行いました。今年は会報を創刊することで会員も増え、例年より多い約三十名の皆さんにおいでいただきました。

法要のあと、高野寺会館で定例総会を開き、本年度予算を決定すると共に、四月六日の岐阜遭難記念日には講演会を開催するなど新たな取り組みを内容とする活動方針を話し合いました。

四年後の二〇一九年は、板垣退助没後百年になります。会では没後百年に向けて会員を増やし、わが国の立憲政治確立の道を切り開いた板垣退助顕彰の取り組みをいっそう強めていきたいと考えています。今後とも、会員の皆様のご協力をよろしくお願いします。

板垣退助96回忌法要（2015年7月16日の高野寺）

●2015年11月20日　発行
●発行者　古谷　俊夫
●発行所　高知市本町2-2-31
●特定非営利活動法人　板垣会
●TEL（0887）55-2860

板垣会々員募集

年会費　2,000円
板垣退助顕彰に御協力を！
入会は別途振込用紙をご利用ください。

板垣退助岐阜遭難134年
記念講演会のお知らせ

明治15年4月6日、岐阜中教院で暴漢・相原尚褧（なおふみ）に襲われ刺傷した自由党総理板垣退助は、「板垣死すとも自由は死せず」との名言を残しました。

翌年から、土佐の自由民権派はこの日を板垣遭難記念日として多くの人が集い、その催しは戦前まで続きました。

戦後は自由民権運動に直接かかわった人もいなくなり、この催しは絶えてしまいました。

板垣会では、板垣退助の自由・平等・博愛の思想、立憲思想を継承するため、遭難記念日の催しを復活させることにしました。講演や懇親会、史跡めぐりなどを企画し、「自由の神」と称せられた板垣退助の顕彰活動を広げます。

- ●と　き　平成28年4月9日（土）　午後3時～5時
- ●ところ　高知市立自由民権記念館
- ●講　師　真辺　美佐 氏（宮内庁書陵部主任研究官）
- ●演　題　「近代日本政党史上における板垣退助」
- ●主　催　NPO法人・板垣会
  高知市立自由民権記念館

終了後、自由懇親会を行います

会議・宴会・祝事・祭事・法要等にご利用いただける
多目的ホール・座敷 各種会場を完備

観光・ビジネス・スポーツ合宿等 目的に合わせてご宿泊可能

Thank you 91th Anniversary

ひときわ輝くおもてなし

高知 サンライズ ホテル

www.kochi-sunrise.com

〒780-0870 高知市本町２丁目 2-31　Tel 088-822-1281